

ある夏の体験

平本節子

どこまでも続く青々とした草原、紺碧の空、ほかに何も無い……。
遠しい夏のある日、私はそこに立っていた。

「あそこにかすかにへこんだ所があるだろう？ よーく見るんだ」
中山先生の声がだんだんとはっきり聞こえて来る……。

私は青森に来ている。昨日の早朝東京を発ち、夜遅く本州最北の地に着いた。まだ新幹線はなく、東北本線で朝から汽車に揺られてやって来たのだった。考古学発掘実習のために……。

「へこんだ所を掘るんだぞ」

「先生、こっちにもう掘りかけたのがあります」

「君達じゃ無理だろうからある程度やっておいた」

そう言う中山先生の出で立ち、脚にはゲートルを巻き、地下足袋を履いている。首には手拭い、頭には麦わら帽子。助手を務める岡村先生も同じスタイルだ。水を得た魚のように中山先生はキビキビと指示を出す。穏やかな岡村先生は、静かに学生達に説明を始めた。男子達は喜々としてクワやシャベルで、途中まで掘ってある円形状の穴を掘り進める。

「女子達は邪魔だから、上へあがれ！」

「よかったね。穴を掘らなくていいって！」

など言いながら、私達は草原へ上がる。が、足元は草に覆われ、羽虫がブンブンと音立てて、私達の周りを飛び交う。都会育ちの私達は、キャーキャー逃げ廻りながら、下の様子を見る。

この発掘実習に参加しているメンバーは、学芸員の資格を取得するために集まった三〇名。当時我が校にだけしかなかった、この学芸員資格を得るための講座は人気があった。その必修科目である発掘実習には、在校生は無論のこと、一般社会人、その他に人類学部からと、医学部から国立の大学院生も参加していた。彼等は、人骨が出土した時に必要であり、勉強のために参加していると聞き、なる程と納得した。

「降りて来ていいぞー」という先生の声に、私達女子は再び円形の穴へ降りた。

「これで土をそっと削って、こっちで土を払い除け、出て来た物をそっと取り出すのだ」
先生はこう言うと、小さなシャベルと小形のハケを私達に手渡した。

「丁寧に、そっとやるんだぞ」
先生の声を背に、穴の壁面をシャベルで削り、ハケで土を払う。けれど、やってもやっても何も出て来ない。何かに触る気配すらない。

ジリジリと容赦なく照りつける真夏の太陽！ さえぎる物もない。太陽光がヒリヒリと肌を刺す。汗がしたたり落ちる。ふっと一陣の風が頬を撫でてゆく……その冷たさに、最北の地にいることを私は感じた。

ここは青森市の南西部にある三内丸山遺跡さんないまるやまとして、日本有数の遺跡の一つである所だ。この辺りには、縄文時代前期から中期に、大規模な集落があったようだ。今から一万二千年前から、二千三百年前まで約一万年にわたり存在したという。

人々は穴を掘って床とし、その周りに骨組を作り、屋根を葺いた竪穴住居に住み、狩猟や木の実を採取して生活していたようだ。豊かな自然に恵まれていたからだろう。

この地の本格的発掘調査が始まったのは、一九九二年のこと。私達が発掘実習出来たのは、本格調査が始まる三〇年も前のことだったので、実施することが出来たのであろう。

「この土の床の上で、どんな生活をしていただろうね？」

「子供はいたのかしら？」

「言葉はあったのかなー？」

などと小声で言いながら、私達はひたすら土を削ってはハケで掃くことを繰り返す。

「オーイ、こっちへ集まれ！」

中山先生の声に掘っても、削っても何の手応えもないことに、うんざりしていた私達は先生のもとへ飛んで行った。

「土器の破片かな？」

「一万年前のものでしょうか？」

「厚みが違うので、これとこれは別の物ですね」

「年代が違うのかもしれない！」

など目を輝かせ皆、論じている。その見つめている先の物は、三センチ程の何かの破片。こんな小さな物が出て来ただけで、この騒ぎ……。土器や埴輪がザクザク出て来るものと思っていた私は、この現実には衝撃を受けた。

朝から日没まで作業をしても、収穫は小さい土器の破片らしき物が十数個。

ああ、これが現実！ 埴輪や壺がそのまま出て来るわけがない。ひたすら土を掘るのみ……。さらにこの小さな破片を年代別に区分し、それを集めてつなぎ合わせ、土器や埴輪

にする。私達が目にする出土品は、こうした過程を経た物なのだ。ここに到達するまでの地道な作業は、途方もない辛抱強さと、根気が必要なのだ。そこには何千年、あるいは何万年前の人類の姿を、生活の営みを空想するという壮大なロマンがなければ、決して出来るものではない！ということを私は学んだ……。

草原の果てに、真っ赤な夕陽が沈もうとしている。まるで青春の名残りのように……。

夕陽は地平線に消えてゆく……。

ああ、とうとう消えてしまった。

あれは一体いつの日のことであつたらう。遠い昔、五八年も前の夏の日のこと……。

学生生活最後の夏の体験、私は大学四年生の時であつた。

あれから長い長い道のりを、私は歩いて来た。あと二ヵ月で八〇才になる。

家庭を持ち、子供を育て、仕事をし、そして四年前夫を亡くした。そして今一人、残された日々を送っている。

私は長い時をかけて、幸せという名の小さな破片を見つけることは出来たらうか？ そしてそれを拾い集めて、埴輪という形にすることは出来たらうか？

今になって人生とは、発掘と同じではないか、と気が付いた。苦労に苦労を重ね、小さな幸せという破片を見つける。そしてそれを根気よくつなぎ合わせて、埴輪という完成品を作り、幸せを感じる、という……。

あの時のメンバーは、どうしているだろう。一人は考古学者として、一人は人類学者として名を成し、テレビ映像で見たことがある。

すでに社会人であつたのに実習に参加した人達は、学芸員として即仕事に役だったことだろう。

あのメンバーの中で、たった三人しかいなかった女子学生。一人は地方都市の女性リーダーとして地域のために尽力し、一人は商社マンの奥さんとして世界中を飛び回った。そして私は手工芸作家として、作品を制作発表し、多くの弟子を育て、その人達は日本中で活躍してくれている。三人共、せっかく学習して得た学芸員の資格を、役立てることはなかったが、あの夏の日の発掘によって人生というものを、そして、かけがえのない大切な事を学ばせてもらった。

壮大なロマン、それは人生そのものであつた。

「東京がらおい^出ですか？

遠かったべな？

そげな遠ぐから、よく来てくれただな！

三内丸山で発掘がえ？ おめんど女の子もがえ！ びっくりだ！

まだ、ございんね。待ってるがら……」

そう言ってくれた宿舎のおばさんの、鼻に抜けるフランス語のような心地よいやさしい響きが、遠くから聞こえて来る……。